殉難　警察官吏之碑

観音山の忠魂碑のすぐ北側に大きな立派な石碑が建立されている。『殉難　警察官吏之碑』と太い字で深く彫られ、石碑の裏側を見ると殉難の経緯が記されておる。

『故　青森県巡査　千葉徳太郎　明治三五年九月五日殉難
大正拾三年九月五日建立　発起人　金木警察分署　嘉瀬消防組』

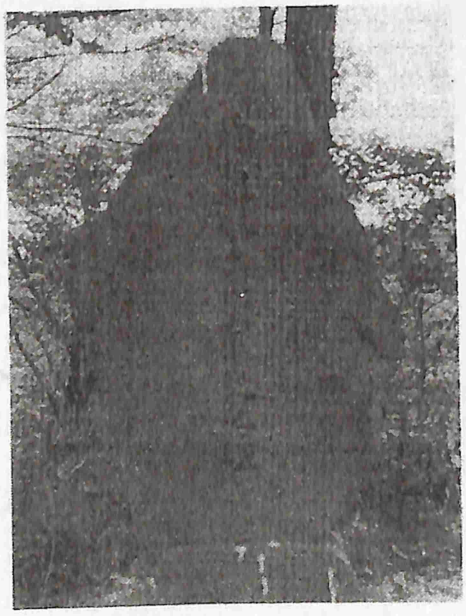
千葉巡査は弘前市和徳町小田桐岩太郎実弟として生れ、後に北郡金木町藤枝の千葉家に養子として迎えられ、志を立てて明治三十二年九月二十日金木警察分署に配属され、間もなく選ばれて金木警察分署嘉瀬駐在所勤務となった。資性剛毅にして職務に忠実、特に探査にすぐれていた。

明治三十四年七月五日の夜、嘉瀬村巡査駐在所在勤の千葉巡査は、受持管内の巡邏途中、中野新田（五所川原市毘沙門）附近で、駄馬に桧柾を積み運搬中の男を発見した。

不審を抱いて職務尋問したところ、積荷の桧柾は無検印であり、盗材木によって製造した贓物と認められたことから、さらに取調べのため、千葉巡査は、その男に対し、金木分署まで同行を求めた。ところが男は同行を拒み、深夜を幸いに逃走、やっと追いついた所、千葉巡査の官帽を奪って破り捨て、さらに組みついて抵抗してきた。そこで千葉巡査は、やむなく格闘の末に逮捕したが、犯人の抵抗があまり激しく、その際不幸にも腰椎骨に重傷を負った。しかし、責任感の旺盛な千葉巡査は痛みをこらえてその後も勤務を続けた。

明治三四年八月二九日、千葉巡査は衣類雑品米穀類の窃盗犯人を探知し単身逮捕におもむき、この時も犯人の抵抗を受けながら逮捕し任務を全うした。

しかし犯人の暴行によって、同じ腰椎骨を前よりも強く痛め勤務不能になり、以来弘前に転じ療養に努め手術したが効なく



殉難の碑

病状が悪化、遂に明治三五年（一九〇二年＝約八一年前）九月五日、二十六歳の若さで帰らぬ人となりました。

明治三四年・三五年の金木警察署沿革史によると、千葉巡査殉職の経緯について次のように記されている。

『嘉瀬駐在巡査千葉徳太郎は七月五日午后十一時二十分頃、受持内夜警巡邏の途次中の中野新田に於て、北郡中川村大字種井、高橋元吉は、駄馬に無検印の桧柾を付け来りしを認め、右は盗材木にして製造せる贓物を故売したるものと認め取調の末、金木分署へ同行を求めたるに元吉はこれに応ぜず、千葉巡査の冠せる官帽を奪ひ取るやいなやこれを破りて投棄し、すかさず組付き夜陰深更近傍に人なきを幸ひに巡査を殴打して逃走せんと暴力を加へしも反って其場に組伏せられ、将に縛せられんとするに際し必死となりて抵抗し、千葉巡査を倒して頭部顔面を鉄拳にして乱打せり、此時、巡査は腰椎骨を痛く打付傷痍を受けしも執務し居りしに後、八月二九日午后四時、嘉瀬村秋元長之助方に於て衣類雑品米穀等を窃取せる嘉瀬村鳴海与太郎の犯跡を捜査し、逮捕するに当り、再び同一事実に遭遇し、十月十三日、地を弘前に転じて局所切開掻爬、治療を受け療養、怠りなかりしも経過、日に悪く結核性腰椎炎傷症となり、膿漿絶えず生命覚束なし巡査、千葉徳太郎、明治三四年中賊の為め傷痍を受け治療中の処、明治三五年九月五日弘前市大字和徳町、実兄　小田桐岩太郎宅に於て医薬効なく遂に死亡した。』

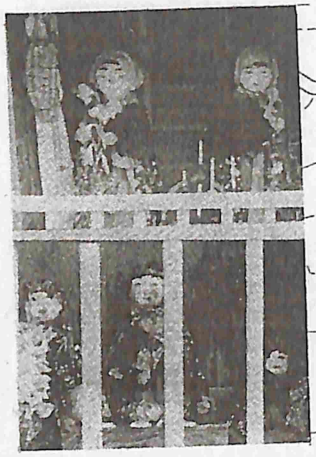
氏　名　千　葉　徳　太　郎

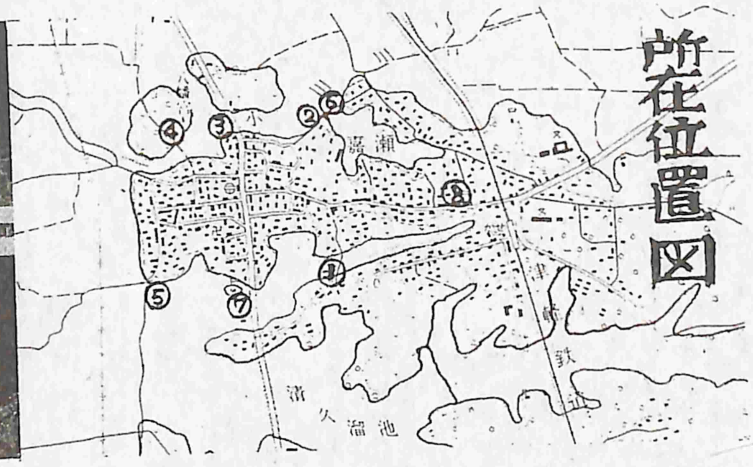
本籍地　青森県北津軽郡金木町藤枝

沿革＝嘉瀬巡査駐在所を開設したのは明治二〇年（一八八七年）＝喜良市村巡査駐在所開設明治二一年＝川倉巡査駐在所駐在勤務明治三十年＝木造警察署金木分署設置明治拾年（一八七七年）＝警察区改正　五所川原警察署金木分署の管轄は金木・中里・武田・嘉瀬・木良市・内潟・相内・脇元・小泊の九ヶ村（明治二二年＝金木警察分署庁舎新築移転（大字金木朝日山一一八）大正拾年＝金木警察分署五所川原警察署より分離独立、金木警察署となる、大正拾五年＝金木警察署の現在の庁舎は大字金木字管原二二二番地、総鉄筋コンクリートで昭和三八年五月三日落成。

（資料提供金木警察署＝沿革史より原文のまま掲載させて載きました）

＝秋元惣之進　記＝





⑧ 上 保食神社馬頭観音いこぐ穴前の地蔵

下 小栗崎通り保食神社横の地蔵

辻　地　蔵

写真取材ルポ　木　下　清　一

津軽半島の中部、中山山脈の西根に所在する純農村、青森県北津軽郡金木町大字嘉瀬、嘉瀬の部落を一巡してみると所在位置図のとおり、嘉瀬部落の村端れの辻々に辻堂があり、石地蔵が二・三体納まり村を囲んで位置することがわかる。

地蔵は慈悲をもって庶民を

③ ▶嘉瀬と金木の間の川コ奴橋のたもとの地蔵

済度する菩薩とされ、古代インド仏典による『クシティ・ガルベ』。『クシティ』は大地。『ガルベ』は母体を意味すると解され、万物を生み育て、大地の恵みを与える仏とされ、奈良朝時代に日本に伝導された。保元・平治の乱に至り京の都は餓鬼地獄相となり、庶民の間に流布されたのが、六地蔵（地獄道・餓鬼道・畜生道・人間道・天上道）の六道から、庶民もろ人の苦しみを救う教えが広まり、これが藩政時代に入って、道を守る道祖神と地蔵が結び付けられて、部落に災害・疫病を入れない、子を守り育てる菩薩が地蔵菩薩として、津軽の庶民の間に広まり定着、地蔵

④ ◀ 古くは金木への往還道だった八幡宮入口の地蔵

⑤ ▶ 古町から狐崎に出る旧道，古町端れの地蔵

講が村々にできる。

畑中の小田川奴橋のたもと、保食神社（馬頭観音）いこぐ穴前の地蔵。冷水と小栗崎の野合い、旧金木道八幡宮前と、狐崎・長富に至る旧道古町端れの地蔵。旧役場前三ッ又道路端にある地蔵と、その所在する位置をみるとき、私達の祖先は、村の中に疫病・悪魔を入れてはならない。村中安全の願いを、村の端れの辻々に祠を建て地蔵を安置した、庶民のいのりを知ることができる。

⑥ ◀ 小栗崎を村端れて冷水に至る小田川沿い道の地蔵

① ▶ 旧嘉瀬村の役場前の地蔵

嘉瀬の田甫に稔りの穂がゆれる秋晴れの一日、辻地蔵写真取材巡りをする。

辻堂には季節の花が供へられ、真新しい帽子と花柄模様

の着物が着せられ、顔もきれいに化粧がほどこされて、眉が引かれていた。どの地蔵の顔も違って見えるのは、冥府の彼方の我が子の顔を地蔵に写して、幼くして亡くなった子への慈母の心情か、我が子の顔を地蔵に再現したのだろう。

野良帰りの老婆、八幡宮前の地蔵へ、食べ残りの駄菓子を供え、暮れやすい秋の陽の影を、橋のたもとに長く残して、後町に鍬を肩に去って行った。

藩・代官・地主に過酷なまでに年貢米を搾取され、地獄の生活をしいられた私達嘉瀬の先祖は、地蔵に何を願ったのか、今地蔵は何も語らない。

⑦ ◀ 上鍛冶町の端れ薬師神社境内の地蔵

② ▶ 小栗崎に至る冷水村端れ小田川端の地蔵

【ねぷたはこどものもの】

ねぷた考

そもそも『ねぷたの起源』は、観光の面からか、ねぷたPRの面からか、延暦二十年（西暦八〇一年）征夷大将軍坂上田村麻呂が東日流に浸攻、強靱な東日流蝦夷に手こずって一計を案じ、ねぷたを作って夷敵をおびき寄せて攻撃、降服させたことから『津軽ねぷた』が起因すると伝承されるが、史実では、田村麻呂の足跡が津軽におよんだ事蹟がほとんどないことが本当で、斉明四年（西暦六五八年）阿倍比羅夫日本海を北上、東日流蝦夷を討ったとされるが、これは大和朝側の記録であって、東日流蝦夷は降服したのではなく、対等な立場での和議が成立している。

田村麻呂の足跡が残っているのは奥羽の胆沢（水沢）までで延暦二一年（西暦八〇二年）胆沢に柵を築いたとある。

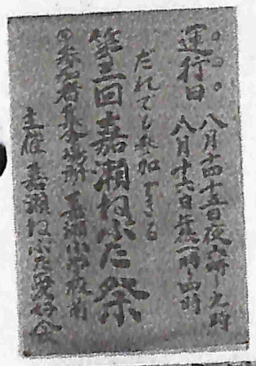
津軽が実質的に中央政権に支配されたのは文治五年（西暦一一八九年）源頼朝が奥羽を平定した以後からであったことから遠く[illegible]年代にさかのぼって、

田村麻呂と『ねぷた』と結び付けるのは、『まゆつばもの』である。後世に至って、『ねぷた』と田村麻呂の事績を結びつけたものだろう。

また、文禄二年（西暦一五九三年）津軽為信が盂蘭盆の七月、二間四方の大灯籠を作って、京都の大路にくり出したのが、『ねぷた』の初まりとする説、いろいろあるが、ほんとうは、古代からの東日流の自然崇拝に基く土俗信仰と併せて、仏教伝来に伴って、農民の悪霊退散を願う信仰が同化して、邑から、自身から悪霊を払い流すことから、現在の『ねぷた』に発展したものだろう。

時の権力者、または為政者によって作られたものでないことは、たしかなことだ。

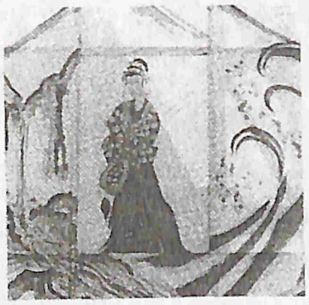
昭和十五年頃までの嘉瀬の『ねぷた』は、こども達や素人が寄



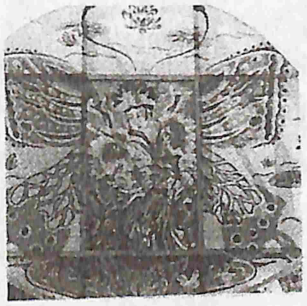
上 送り絵
下 作者鳴海博康と扇ねぷた

り集って、木っ端で扇ねぶた角ねぶたを作り、下手な絵を書いて、ねぶたにローソクの灯を入れて村の大通りにくり出して、『ローソクケロジャ』と村をねり歩いたもので、紙がやぶれてグラーリグラーリとかたむいた『扇ねぶた』。それが在方の『ねぶた』だった。現在のねぶたは専門のねぶた絵師の手によって豪華絢爛を極めている。これが本来のねぶたの姿だろうか。

昭和五十五年から、嘉瀬在住の三〇名以上の青年有志の手で、八月になると、『ねぶた』をこどもの手にと、嘉瀬ねぶたを出している。



上 送り絵
下 作者原田寛と扇ねぶた



上 送り絵
下 作者鳴海輝夫と扇ねぶた

かせねぶた愛好会
実行委員長　斉藤昌男
山中石太郎、鳴海輝夫、野宮正一、原田寛、花田新一、今寿義、其田秋夫、土岐俊一、黒滝繁与、須崎悠悦、沢田潤斉藤実、黒川俊治、松川勉、中野博臣、沢田二恵、鳴海義男、小田桐嘉吉、松川徳次郎、飯塚恭一、吉崎一洋、伊藤誠、間山清蔵、沢田憲、鳴海博康、原田哲、鳴海等沢田義寛、花田享一、秋元幸徳、鎌田光守、岩村治の方々である。

＊　＊　＊　＊

昭和五七年八月、嘉瀬公民館でねぶた愛好会とふるさとを探る会の交流会の席上、愛好会の方々は＝こども達がたのしめるねぶたを作ろうと会が発足した＝ねぶた馬鹿の集りだ＝五八年も第四回のねぶたを作る＝と、その意気盛んであった。村のねぶたは、あくまで風土的なねぶたの本質を残すことにあろう。

（木下清一記）

イタコ・ゴミソは津軽のかたりべではなかったか？

山中長三郎

『イタコ』は招魂・霊媒を業とする。『ゴミソ』は神仏をよりどころとして霊感を得て、災害・豊凶を占い、招福の託宣を業とする。

『イタコ』は盲目者がほとんどで、『ゴミソ』は神仏の霊感を得て体得しているので目明きも居る。津軽では神の託宣者・仏の託宣者を総称して『ゴミソ』と云う。どこそこの『ゴミソ』（神様）は良ぐ当ると…。

『イタコ』には二つの系統がある。下北半島の恐山大祭、北郡金木町川倉の賽の河原地蔵尊大祭は、イタコとしてあまりにも有名で、恐山大祭に集るイタコは毎年四十人余りであると云われるが、土着宗教系の霊能力者は約半数で、他は琵琶法師の流れをくみ発展した盲僧である。

招霊形式は両者ほとんど同じであるが、教義的な違いを両者は持っている。師匠から弟子に、その招霊術が口伝され、師事した師匠のやり方をそのまま踏襲するイタコと、一つの教義形式を持った歴史的な盲僧のイタコがある。

盲僧は代々比叡山延暦寺系の教義から成り、て修行の成果によって体得されるもので、青森県弘前市にある報恩寺が現在、盲僧の総元締となっているという。現在生存している三十数人の盲僧に対し、たとえば、何月何日に集れというお布令を出すと、どんな事情があろうとも、盲僧は必ず集ってくる。もしお布令に違反すると罰っせられ、その位階を奪われるといいます。

盲僧には、五つの位階がある。すなわち最高位が検校、次は権検校その下が勾当、権勾当、座頭となっている。現在生存者の最高位者は権検校只一人で、次は勾当が数人いるだけである。

盲僧の場合、『盲僧鑑章』を受けるためには、きびしい修行をしなければならない。現在勾当の位いにある伊藤よし（八三才）さんが、自分の盲僧になった事情を次のように語ってくれた。

よしさんは、二十才の時に、突然両眼とも失明しました。彼の祖母のすすめで、小山内文さんと云う盲僧の所に弟子入りして、毎日の修行は、とてもきびしいものがあった。

師匠は、よしさんに対して『おのれを無くさないと無我の境地になれない』ということを、朝夕教えこんだ。

弟子入りして一年目、目が見えないのに心眼で物が見えるようになってきた。そればかりか、神仏の声が聞かれるようになり、訪ね来る

人々の顔形、身に付けている衣服までと判読できるようになった。

入門以来一年数ケ月、よしさんはきびしい修業を終え、最後の試験を受けることになった。

これは、まる六日間、不眠不休で修行を続けるもので招神術招仏術の総仕上げが行われ、その間に九回の水ごりを取り、ムチ打ちを受けるきびしいものであった。

その試験をパスしたのち、報恩寺職から、まず座頭の『盲僧鑑章』を受けるのである。それで一人前の霊能力者〜盲僧となり、神仏の力を借りて、予知や神仏を招き、そのお告げを伝え、死者の言葉を生者に聞かせるようになるのである。

・　・　・　・

密教の即身成仏とは、有我無我の境地。盲僧は師匠に付き、その修行中に無我力の大切さと、無我力の実行を教え込まれる。盲僧が死者の霊を呼ぶ場合、まず招仏の呪文を唱えながら、祭文弦という一弦琴を弾きながら、死者を自分の身体に呼び寄せるのであるが、そのときの盲僧は、完全に我れにあって我れに無しの状態となっている。

したがって、盲僧自身は、死者の声をどれだけ伝えても、盲僧自身は何をしゃべったか、まったくわからないのである。この点、世間一般でよくやられている霊媒の招魂法とは、全ったく異っているし、招霊の基本が違っている。

盲僧達が、自分達の超能力の基本点を無我力に置いているのは、やはり、精神力統一の完全なこと、自分自身を制御できるのが容易なためである。

私が取材した霊能者のほとんどは、自分の超能力を如何にフルに発揮し生かせるかは、すべて精神統一ができるかどうかにあり、また雑念多い我れを、如何に制御できるかにかかっており、それをなしとげる最良の方法は、無我力の修練にあると、異口同音に語っている。

〃心頭滅却すれば火もまた涼し〃式の無我の境地は、とても凡人にはなかなかできるものではない。そして無我状態は顕教において要求されているものである。しかしながら盲僧修業密教においては、そのような無我を求めていない。その修練の高まりによって強まる無我力のいかんによって、超能力を引き出せるかにかかっている。

・　・　・　・

藩政時代、いや第二次世界大戦（大東亜戦争）前までの盲目者の糧（カテ）を得る、生きる道は大道門付け芸人になるか　『イタコ』『ゴミソ』の道に入るしかなかった。

津軽に招魂・託宣を業（ワザ）とする巫女の発生した因子はさだかでないがおそらく森羅万象これみな神が宿る、人間が死んでも霊魂は残るという古代からの原始信仰にさかのぼるのではないか。

農漁狩猟の豊凶。生活信条のあらゆる問題について、巫女の御託宣をよりどころとして生き、招魂による死者の語らいを通して、一族の交りを深めていったことは、現在津軽に残っている媒介者、それが『イタコ』『ゴミソ』の姿である。

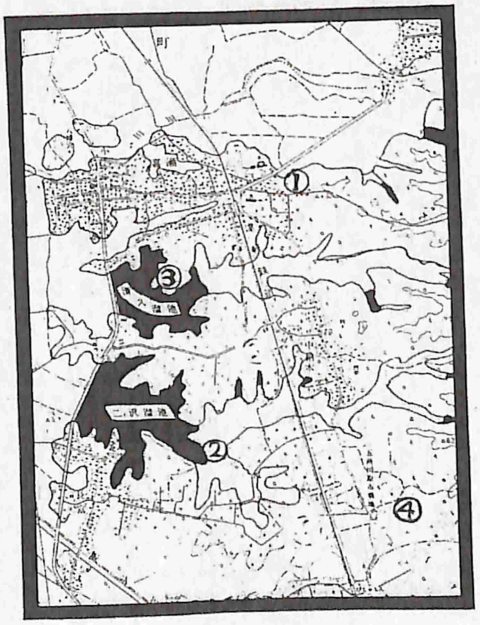
ほとんど文盲であった封建時代の在村々の住民は、衣食住もままならない日常生活の精心的なよりどころの根拠を、これら『イタコ』『ゴミソ』の口述に安らぎを求めたことは、彼等『イタコ』『ゴミソ』は在家村々の住民にとって一種の、伝承者である『かたりべ』でもあったろう。

ふるさとを探る

山中正津

嘉瀬から直線にして南へ約二八キロメートルの地点、南津軽郡田舎館村『垂柳遺跡』に古代水田跡が出土、弥生人の足跡が見つかった。と報じられたのは、ことし昭和五十七年十一末であった。

わがふるさとにも一九〇〇年前の狩猟・漁撈人が住んでいたのだろうか。ふるさとを探るには、史実を探究するか、伝説を継承するか、ということになるが、二つは一致しない点が出てくる。



① ＝ 嘉瀬遺跡
② ＝ 鎧石遺跡
③ ＝ 清久溜池遺跡
④ ＝ 三ノ沢溜池遺跡

伝説と史実

例えば、第一集で取上げた『人丸の神石』にしても、金木郷土史には、『……その出崎には年代不詳（凡そ四百年前と推定されている）だが、人丸（人麻呂）の銘を背後右肩に刻んだ重さ一トン以上の大石が歌の神として祀られてあった。嘉瀬部落の古老間に語り伝えられるところによれば、前記してあるように記録はないが、五百年前、即ち湖水時代、人丸の大石が十三浜より船でこ[illegible]に運れたものと云われ……』と記され、これは伝説となっている。

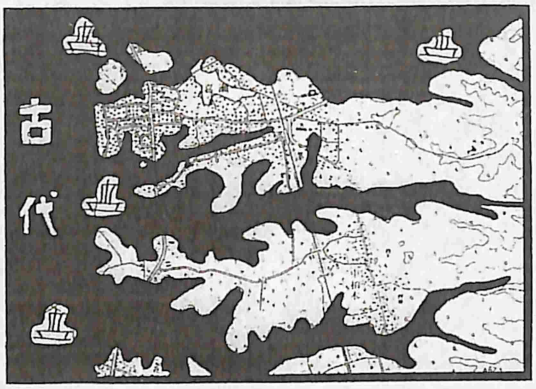
ふるさとを探る会が、結成して第一に取上げたのは『人丸の神石』の由来と遷座計画である。

調査したところによれば『嘉瀬に山中龍助（天保十年生れ）という人が居り、非常に歌が好きで、柿本人麻呂を畏敬していた。人伝えに十三潟村（現市浦村十三）の傍に乱石がある』と聞いて兼ねてから好気心を持っていたが、遠い場所なので遠慮していたところ、或る夜一人の翁が夢枕に立って『吾は湖辺に廃れたり、速く来て求め得』と告げた。

龍助は、『これぞ、人丸のお告げだ』と益々心に信じ、今泉村（現中里町今泉）の知人の協力を得、また四・五人の同志と共に十三浜の湖辺の乱石を探したところ、背に『人丸』の二字が彫られた石が見つかった。

『これぞ夢のお告げどうりだ』と喜んで、人夫二十五人を雇って嘉瀬に持帰り、村の南端にある清久溜池東方の出崎、雲雀野の松林の中にお堂を建て安置したのである。これが慶応乙丑（きのとうし）年六月十八日のことである。

山中龍助は、明治十二年（一八七八年）弥生の候（太陽暦四月）人丸神石の入魂と自分の四十二才の厄除け祝を兼ねた、大歌会を催し、人丸崎の御堂には県下の歌人をはじめ、遠くは伊豆国（静岡県）、渡島国（北海道）からも多数の歌人俳人が集り盛会であった。



この歌会に参席した主な人々の名を挙げれば、大導寺繁禎、斉藤規文、土門実俊、菊地廣英、葛巻行庸、長利龍雄　宮田　充、下沢保躬、長利仲聴、安部井磐根。

このほかにも俳人が十数名参会した模様で、龍助の曽孫に当る山中喜美雄氏（板柳町在住）が保存する短冊・巻物等により明らかになったものである。

金木郷土史に載った『人丸の神石』は言い伝えである。即ち伝説となったもので、わがふるさとを探る会が調べたのは『新撰陸奥国誌』を基に調査したところ、山中龍助が人丸の神石を探し出し運んだものと判ったのである。

そこで、伝説と史実との食い違いをみてみると、『五百年前、即ち湖水時代、十三湊より船でこの地に運れ：：』とあるが、実際は慶応元年で百十八年前の事であった。

しかし、伝説は、翁が夢枕に立ち、神のお告げとばかり、十三湖辺の乱石を探し求め発見し、嘉瀬の雲雀野の丘陵まで、湖水が満ちているのを幸いに、これを船口乗せ運んだ、ということはロマンがあって、物語りとしては最高であろう。

現実は、石に刻まれた『人丸』の文字は、自然に出来たものではなく、人工的に彫られたものであり、ダルマの形をしたような大石が十三湖辺にどうしてあったのか疑問となってくる。

現在は、十三湖の岸辺は砂地で、日本海側の海辺も浜砂利の産地となっており、人丸神石のような大石を探し出すことは困難である。史実を追求してゆけば夢もロマンもなく、全く素っ気ないものになる。更に真実を求めてゆけば、考古学へと移ってゆく事になる。

遺　跡

中世、古代、古墳時代は『語部』によって伝えられ、伝説も時の権力者の都合のよい歴史が作られてゆくのである。弥生時代、縄文時代旧石器時代は、発掘した出土品によって実証されてゆくのである。